

私の見たインドネシアの幼稚園と子どもたち

(後編)

近藤 伊津子

絵本と紙芝居を教室に持って行き、園児の前で本を読み、紙芝居をした。日本で本を選ぶ時、規準にしたのは（この園には四冊贈ったが、別の小学校など合わせて20冊）日本人の作者のものであること、くっきりした絵であること（この国に詳しい数人の忠告、しかし、これは必ずしも当たっていないと思った。松谷の『もうねんね』で後述する）、私のインドネシア語の力で翻訳できる簡単な明瞭な文章であること、イスラム教のタブーに触れないこと、そして、私の娘が好きだった本の中から。

四冊の本と紙芝居一組、いずれにも、黒のマジックイ

ンクでインドネシア語に翻訳して書いた。幼児語が非常にむずかしく、留学生の櫛田武弘氏と、バンドン市民で、幼稚園教師の経験のあるムルヤルト・ふみ子氏の協力なしでは到底出来なかった。

順次、本を読んでもたちの反応を記してみよう。

絵本

『もうねんね』松谷みよ子あかちゃんの本

瀬川康男え、童心社

1. ハーグ Mengantuk ya

Selamat tidur Guk

2 ページ Anjing juga bobok

Bobok senliri

3 ページ Mengantuk ya

Selamat tidur Meong

4 ページ Kucing juga bobok

Bobok dengan

Mengehungkan badan

5 ページ Selamat tidur

ku, ku!!

Selamat tidur

pi pili!

Mengantuk ya.

6 ページ Idu juga bobok

Anaknya juga bobok

tutup mata ya

Ku ku ku bobok

7 ページ Sudah waktunya bobok

Sl. Mono juga bobok

Matanya mengantuk

8 ページ Selimut juga bobok

Siboneka juga bobok

9 ページ Sama-Sama bobok yuk

Bobok yuk tutup mata ya

10 ページ Sennua bobok yuk

Selamat tidur

この本は絵が地味で、友人の忠告に依れば、この国の子どもたちには好かれないのではないかと思った。しかし、娘がくり返し愛読したこと、文庫で大勢の幼い子どもたちが楽しんだという実績で決めたが、結果的には、この園児たちも非常によく見て、聴いてくれた。そして反応は、日本の、文庫の子どもたちと同じであった。訳が悪い(?)上に、読み方もとても発音が下手だったろうに、よく聴いてくれた。犬も猫も、ひよこももちやんも……みんなねむい、もうねんね、どの子もそうい

う顔になった。

『みんなでね』まついのりこ 偕成社

Semua Bangun

Semua sudah makan!

Semua ber-jalan jalan!

Semua main ayunan

Semua main meluncur

Semua main sembunyi

Buang air kecil

Semua berjemur

Semua menangis

Semua naik mobil

Semua mandi

Semua tidur

これは赤ちゃん絵本の三冊のうちの一冊である。小さな本に、小さな絵、それ故に子どもの心を引きつける。

二度目に読んだ時は、手を合わせてねむっているところから始まり、ずっと仕草をつけてくれた。みんなで起きて、ごはんを食べて、散歩して……と、そして最後におねねで、手を合せて頭の下に入れてくれた。本と一体化して遊んだ。

『じゃあじゃあ』まついのりこ 偕成社

これも赤ちゃん絵本。この本は大きすぎとなった。自動車で男児はうなり声を挙げて走りはじめ、犬になって吠え、猫の鳴き声、赤ん坊の泣き声（日本とかなり違うのである）水道の蛇口から水はテストスとしたたり、（「じゃあじゃあ」でないのである）、汽車の踏切りでは、特急が走り抜け、テンテンテンと警笛は限りなく鳴る。トランペットはなりひびく。机の上に乗ったにわとりはククルールと鳴く。乗りにつけて、楽しんだ。やっと静かになった時に、日本の犬、猫、にわとりの鳴き声、赤ん坊の泣き声などをしてみせた。そして、さっそくに真似して、また大きすぎ。こんな小さな本でこんなに楽

しむことのできることは、もしかしたら日本の子どもたちには失われたものかもしれないと思った。

Mobil RR.....RR.....RR.....

Anjing guh guh guh

Air tes tes tes

Kertas bret bret bret

Penyedot Abu nying nying nying

Ayan kukuruyuh

Palang Kereta api teng teng teng

Bayi oee oee oee

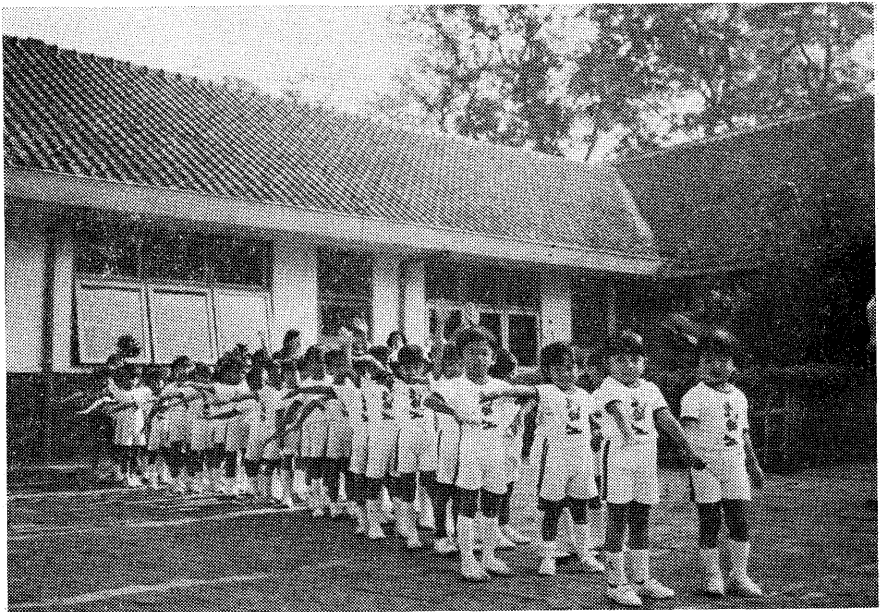
Kapal terbang ngeng ngeng

Kucing meong meong meong

Terompet tet tet tet

『はいはい』 まじいのりこ 偕成社

赤ちゃん絵本。簡単な挨拶のくり返し、「こんにちは、
と言って「はいはい」する。この本は同じく赤ちゃんの



絵本の「あめふり」とあわせて娘がよだれをぬりつけ、あげくにしゃぶって愛玩したものであった。

ページをめくりながら *Selamat siang* ^{セラムツ・シヤング} と言うと、そこにひよこを見つけて大きな声で、*anak ayani* と言う。次ページで、「はいはい」*Da Da!* と言うと、一斉に手を振って *Da Da* と言う。次の象が「こんにちは」と出て来た時は歓声を挙げて「ガジャ！」みんなたちまち「ぞうさん」になってしまった。のっそ・のっそと歩いたり、耳をバタバタするもの。そしてみんなで「ぞうさん」の歌をうたった。その次の兎でも一斉に兎の群舞。耳に手を当て歌を歌いながらおどった。きりんでは真似をしてくれなかったが、歩きまわって歌をうたった。おしまいの蛙は大変である。鳴き声ととびはねることに熱狂し、私はなかなかダダと言えなかった。「おしまい、またね」*Sampai sekian ini, Sampai jempa lagi.* ぐやっと落着いてくれた。

これら四冊の本で後の二冊はこのように子どもたちを夢中にさせるとは予想もしなかった。この国の子ども



本の事情は良くない。したがって、あまり絵本に触れないですごして来た子どもたちだろうと思われる。中級階層の家庭には本が入らないそのまま、テレビが居間に据えられている。日本のように長時間の放映でないので未だ救われるが、こんなに感性の豊かな子どもたちがどうなっていくのか……今から既に惜しまれてならない。一冊の本にこのように積極的に同化し、体験を存分に発揮するエネルギーには圧倒されてしまった。

文庫（十三年間）では一度も、このような子どもたちの反応を見たことがない。

いくらか、民族の違いから来るものがあるかもしれない。この国の人々は歌・踊りが、自然に巧みで、しかも日常性がある……しかし思えば、日本もかつては、そういう民族でなかったのか。そして子どもたちを比較して見るとき顕著に失われたものが浮力して来るのではないか。やがて失われようとしていること、既に失ったこと、流れの中で哀しんでばかりおれないが、私にとって、個人的には、忘れ得ぬ感動の在園であった。

紙芝居

『るるのおうち』まついのりこ 童心社

かさが風にとばされ、自分の家を探し、見つける、という単純な筋のものである。

子どもたちは前記の本に対するような反応はなかった。一度しかやれなかったことや、私自身、紙芝居についてはあまり見識なく、積極的でなかったこと、つまり経験と力不足がたちまち顕れたのだろう。

二度・三度とくり返してみたかったと今は思う。

絵本は本の中に見るものを引き込む、それに対して、紙芝居は見るものの前に、とび出して来るといわれる。とび出すまもなくだったのでないだろうか。子どもたちと、作者に申しわけないことであつたと思う。

別れの日、既にめったに被らなくなっていた白い帽子を被って登園した。（この国では田畑に出ている百姓と

か、ベチャ（自転車の人力車のようなもの）引きの車夫、それに日本人ぐらいである、帽子を被るのは。）

園長先生は、さっそく帽子をご自分の頭にのせてみせて、子どもたちと踊りながら、歌を唱ってくれた。

トピーサヤ ブンダール

ブンタール トピサヤ

カロウティダ ブンダール

ブカン トピーサヤー

（私の帽子は丸い、まるいは私の帽子、まるくないのは、私の帽子でない）

この日、本、紙芝居の他に、手製の軍手指人形（猿と猫二本ずつ）、男女児各一人分の（手縫いの）ゆかたと三尺おび、下駄を贈った。さっそくにそれを着てみてくれたが、浴衣姿で見ると、日本の子らとほとんど違いがない。それ故、一層いという子ら。

園長先生は絵本でも遊具でも、古いもので可いから送

って欲しいといった。（その後、まだその約束を果さないでいるが。）

絵本は乏しい。そして一般の家庭の子どもたちが気軽に手にとって楽しむという状況ではないことも知った。

ひとりひとり
Sampai jempa lagi!!^{サンプアイ ジェンパ ラギ} またあおうね

と、この園を又、訪れることを約束して別れた。

（かっこう文庫主宰）